細江カトリック教会だより

冬（12、１月）号

〒750-0016　下関市細江町 1-9-15　083-222-2294　083-222-0970

ホームページ　http://hosoechurch.sakura

聖年

２０２４年１２月２４日に、教皇フランシスコはバチカンのサンピエトロ大聖堂にある「聖年の扉」を開き、「全教会にとって恵みと希望の濃い体験となる」聖年が開幕しました。この通常聖年は、２０２６年１月６日、主の公現の日に、同じサンピエロ大聖堂の聖なる扉が閉じられることを持って閉幕することになります。

信者のすべてに特別な霊的恩恵の時として定められるこの期間中、信者の全ては悔い改め、信仰を深め、神との和解を求めるために特別な行いを励むことが奨励されます。

教会の歴史において、最初の聖年は１３００年に教皇ボニファティウス８世が始めたものです。当初は１００年ごとに祝われる予定でしたが、その後５０年、２５年という周期に変更されました。聖年の概念は、実は旧約聖書の「ヨベルの年」に由来します（レビ記 25 章）。ヨベルの年は５０年ごとに訪れる特別な年で、土地は休耕され、奴隷が解放され、負債が帳消しにされるなど、自由と回復を象徴するものでした。

２０２５年通常大聖年の布告の中で、教皇フランシスコは、キリスト教徒の生活において希望と忍耐の深い関係を強調しています。教皇は、聖パウロの言葉を引用し、「苦難をも誇りとします。私たちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを」（ローマ 5:3-4）と述べ、キリスト教の希望は試練と忍耐を通して築かれることを明らかにしています。

そして、教皇は、希望はわたしたちを欺くことがない理由は、それが聖霊を通じて私たちの心に注がれる神の愛によって養われるからであると説明しています。忍耐は信者が困難に直面するのを助けるだけでなく、信仰の旅における希望を強化し、育む役割も果たします。不安定な世界の中で、希望は力強い励ましの源となり、神の愛と憐れみに信頼して前進することを導きます。「旅する教会とたえず歩みをともにし、信じる人々に希望の光を注いでくださるかたこそ聖霊です。聖霊は、決して消えることのない松明のように、わたしたちの人生に支えと力を与える、希望の光をともし続けてくださいます」。

まるで新しい一日が夜の１２時、つまり０時から始まるように、神への希望のおかげで、私たちの喜びと幸せは、人生の苦しみや試練の暗闇の中にいるその瞬間から始まります。言い換えれば、どんなに困難な状況にあっても、私たちは神が共におられ、私たちと共に歩んでおられることに気づくことです。神の存在に気づくことで、私たちは困難を乗り越える力を得るのです。むしろ、神がそこにおられること、そして神が働いておられることこそが、私たちが倒れることなく、困難を乗り越えることができると言えるでしょう。そして、神の存在に気づき、闇の中に光を見出し、困難なときに希望を持つためには、教皇が語られるように、私たちには忍耐が求められるのです。

教皇は私たちに、具体的な行動を通じて希望を表すよう呼びかけています。それは、祈りを続けること、慈善を実践すること、特に和解の秘跡を受けることです。それにより、和解と憐れみの喜びを体験することができるのです。おそらく、皆が教皇の呼びかけに対して、異なる形で応えていくと思いますが、私たちの教会共同体ではこの聖年を通じて皆が互いに助け合い、特に問題が起こりそうになる時、忍耐を保ちながら人とじっくり会話し、共に信仰を証しする共同体ができるよう期待します。

教皇の言葉を借りて、細江教会の皆にとっては聖年が、救いの「門」である主イエスとの、生き生きとした個人的な出会いの時となりますように、神をまだ信じていない人々にとっての希望のしるしとなりますようにお祈りを申し上げます。

グエン・ヴァン・トアン　神父

＊挿入写真

VATICAN 大聖堂の扉　2018 年 10 月撮影

待降節黙想会

召命に見出す希望

待降節黙想会　12 月 1 日

（宣教地召命促進の日）

講師

イエズス会　召命担当

森　晃太郎　神父

Ⅰ　私の所にくる青年は、司祭・修道者になることを自己実現の目標にしていても、若い者同士が集まり楽しんでいるが、深まりがない。彼ら一人ひとりが、「自分中心」から「**イエス中心**」に変えられる必要がある。何となく教会に行き、皆と活動するのでは行き詰まる。自力ではなく**心が神に向くこと**が大事である。

青年は乾いている。世の流れに流されている。何かを求めているが、響き合える居場所がない。**日常生活**の中で、彼らが**イエス**と**どう向き合う**のか自分の在り方を見つめ直すタイミングがある。その際キリスト教の知識を一方的に話すのではなく、相手にとって、「助けてほしいことは何か。その人に神様はどう関わっているか？救われたのか？」を入り口にする。

知るには3つある。**①知識・情報として知る。②何かをきっかけにして自分の体験として、イエスが関わってくれたことを知る。③友としてのイエスを知る。**

18 歳でオーストラリアに体験入学をした。テニスのやり方を教えられるが、どうもうまくできない。ある時、コーチが「Yes」と言ってくれた。その時、**自分事**としてわかった。繰り返すことで**体験**となる。判断基準となる。その体験を忘れても、ある時気づいて深まる、**信仰**もそのようにして深まる。

中高生には、本人たちが向き合っている状況に合わせて、「生き方」について話すと意識化される。彼らは喜び、幸せ、神の恵みを感じる。イエスの弟子たちは 「よく分からない」 ままついていき、十字架イエスを見て、こんなはずではなかった…と。しかしその後**復活のイエスに出会って、召命**につながっている。

私は小学校ではサッカー、中学校ではテニスに取り組んだ。試合に勝ちたかった。母から「**祈らないからよ！**」とよく言われた。光教会で中高時代を過ごし、20 歳の時テニスのプロになるために東京に出た。イグナチオ教会で、子どものころお世話になった**カンガス神父**に出会った。そこで「教会学校のリーダーたちの集い」でショックを受ける。リーダーとテニスの両立はできない。

ある時試合に勝ったが、**嬉しくなかった**。自分は何を考えているのか？自分の存在は何の意味があるのか？死ぬ時何を持って行くのか？そんなカオスの状態で**復活のイエスに出会う**。それが、私の**召命**（神の呼びかけ）でした。

Ⅱ　待降節を迎えて

受胎告知.身ごもったマリヤとヨゼフの**召命**だけでなく羊飼いたちにも**召命**、博士たちにも**召命**があり、彼らは遂行した。私たちにも一人ひとりに**召命**がある。根本的なところで「**呼ばれて**」いる。苦しい、つらい、忙しい、神に否定されたと心が揺れる時がある。

しかし、やっぱり**神が働いて**くださる。今ここでかかわっていることが大切、今ここでかかわっている人が大切である。自分の殻に閉じこもらず、**自身と向き合い**、本気で祈る。一人ひとりが召命に生き、教会共同体で恵みが共有されている時、その先に司祭・修道者の召し出しもある。喜び、希望がわいてくる。

（記　広報委員）

主の降誕ミサ　１２月２４日　夜

2024年の主の降誕夜半のミサの司祭はトアン神父さまでしたが風邪のため、急きょ宇部教会のディン神父さまに来ていただきました。この仮聖堂で行われるクリスマスミサは今年度で最後になります。この時期、下関市では爆発的にインフルエンザが流行していたせいもあるかもしれませんが、ミサに与る方が少なかったように思います。

私たちのもとに来てくださった幼子イエスの姿を見て、ずーと教会に来られない病気の方や施設に入っている方々、いろんな事情で来られない方に思いを馳せていました。

クリスマスカードとお手紙を出しましたが、いき届いていなくてごめんなさい。

皆さまは、温かいクリスマスを過ごせたでしょうか。

また、各地で起こっている紛争が一日も早く終結し、子どもたちに平和の笑顔が戻りますようにと、新しい年を迎えて祈り続けたいと思います。

いのちのネッツを作ってゆきましょう

12 月 7 日に「いのちの関門ネッツ」を海峡メッセの会議室を借りて、3 周年シンポジウムを行いました。子どもとみんな食堂ロクスひよりやまを立ち上げるときに、生活困窮者を支援する人たちでネットワークを作って協力していこうというビジョンを持っていて、2021 年の 11 月に立ち上げ、それから 3 年が経ったのです。「生活困窮者の職と住まいを考える」というテーマで公の制度と個人支援の限界のはざまで取り残される人たちをどのように支えていくのかということを考える企画でした。予想を大幅に上回る百人に届くほどの人たちが参加してくれました。また、五人のパネリストはそれぞれが現場で活動している人たちで、あらためてこのような人たちがこの社会にいてくれるのだと希望を持つことができました。

さて、私はその前日に韓国から帰ってきたのでした。今回のミッションは長い間日本で暮らしていた韓国籍のおじいさんとおばあさんを韓国の受け入れてくれる施設に届けるという役目でした。ここまでの過程でたくさんの人たちが、この二人のこれからの生活を支えるための助力をしてくれました。この奇跡が起こったことに、助けてくださった人たちに心から感謝します。

このお二人を老人施設に届け、その施設の院長シスターが私をバス停まで送ってくれました。二人を受け入れる決断は難しかったのではないか、と聞くと、シスターは言いました。「マニュアル通りにできるのなら簡単だし、問題も起こらない。でも、人を助けようとするならば、必ず問題は起こるし、そうやってマニュアル通りにいかないことをしていくことが本当の社会福祉だと思う。そして、どんな問題も解決する道は探せば必ず見つかると信じて

いるから。」待降節に大切なメッセージをもらったと思いました。そうか、マニュアルの外にイエス・キリストは生まれたのだと。マニュアル通りにいかない中で神さまに出会っていくのだ、と。

私はシンポジウムの最初の挨拶でそのシスターのメッセージを伝えました。教皇さまは私たちによきサマリア人になるようにと呼びかけています。そして、サマリア人が宿屋を助け手として必要としたように、人々と繋がりながら困窮者に寄り添いなさい、とおっしゃいます。おじいさん、おばあさんに関わりながら、人々の善意に出会うことができました。このような人と人の信頼のつながりを大切にしながら、人々が人間らしく生きれる社会を支えるネッツを作っていきたいと思います。

北九州の野宿者の自立支援を支える抱樸さんと協力して行う夜の炊き出しは冬場毎週金曜日、海峡広場で 9 時に集合です。**ぜひ細江教会の皆さんも一緒にネッツを作っていきましょう。**

＊シンポジウムのパネリスト

ロクスひよりやま　中井　淳神父

※野宿者の自立支援をする北九州の抱樸さんと協力して金曜日に野宿者の炊き出しをします。

１９９５年　1月１７日のできごと

阪神淡路大震災から３０年経ちました。私たちの脳裏に焼き付いている大災害の一つです。その当時、神戸に二人の友人が暮らしていましたので、その安否を必死で確認したのを覚えています。

それまで、年一回は神戸に集まっていた場所が・・・この街（都会）が被災するなんて・・・とても信じられないことでした。

それから数年後に訪れた時、神戸はほとんど元通りになっていました。北野の坂の店舗で開かれていた震災時の写真展で、三宮のビルの倒壊や友人が務めていた百貨店も斜めに、大きな建物も高速道路の曲がっている数々の写真を見て、こんなに早く復興するなんて信じられなくて。人びとの復興への力はどこからくるのだろうか・・・その力に感動し、亡くなられた方々と被災された人々の苦しみ悲しみが一機に押し寄せて、涙が止まりませんでした。

その後も２０１１年３月１１日に東日本大震災の大惨事が起こりました。
あの日、あの時の・・・未曾有の震災に心が凍りつき、今も続く地震災害、能登半島や世界で起こっている災害に心が痛みます。

被災地の皆さまが安心して生活できる日々が早く訪れることを祈ります。

近藤

教会建替え状況　１月中旬

＊新聖堂の献堂式は3月30日です。
「ともに歩むあたたかさのある教会をめざそう」

Happy New Year

・昨年末、下関市も爆発的にインフルエンザが猛威を振るっていました。皆さま大丈夫でしょうか。
・ベトナムの方々が新しい職場に変わり下関を去っていきます。淋しくなるけれど、彼女たちの幸せせを祈ります。
・教会建替え支援のご協力に感謝！
これからもよろしくお願いいたします（財務）